

## はしがき：外邦図への社会の関心

田村俊和（立正大学地球環境科学部）

科研費課題番号 14208007 としての『「外邦図」の基礎的研究』は、2005 年 3 月をもって終了する。当然のことながら、外邦図の研究は、基礎的であれ応用的・発展的であれ、これで終了するわけではない。それをさらに展開していくにあたり、今後の研究課題を研究グループの内部で再確認するとともに、研究の意義を、グループの周辺を超えて広く知ってもらう必要がある。はやりのことばで言えば説明責任であろうか。

研究課題については、日本地理学会 2004 年秋季大会シンポジウム『外邦図の基礎的研究』のイントロダクションで私見を提示したので、ここではその柱だけ並べておく。

1. 外邦図のほとんどが地形図(基本図)であることに基づく研究課題群。
2. 外邦図が、日本領土以外を対象に、軍事目的で、秘密裏に作製あるいは複製された地図であることに基づく研究課題群。
3. 外邦図が、敗戦時に公式には廃棄されたことになっていることに基づく研究課題群。

あわせて 10 あまりのテーマが思いつく。細分すればその 2~3 倍あるいはそれ以上になる。それらの課題のうちには、研究が比較的順調に進んでいるもの、停滞あるいは行き詰っているもの、やや等閑視されているもの等が混在する。研究の進め方の戦略や戦術を、優先順位も含め、内部で真剣に討論していく必要がある。

一方、外部への説明あるいは宣伝は、手前味噌でいくら意気込んでも、先方がまったく聞く耳を持たなければ取りつく島がない。そこで、外邦図に関する知識をとくに持ちあわせない人々がどのようなことから外邦図に関心を示すかを知っておくのは、無駄ではないであろう。それに関する私のささやかな体験を記してみたい。

1992 年 1 月、東北大学理学部地理学教室に、地元の河北新報の記者が訪ねてきた。「昔の軍が作った地図がたくさんみつかったそうだが」と切り出されたので、「とんでもない、47 年前(当時から数えて)から関係者の間ではよく知られている」と、概要を説明し、サンプルを見せ、さらに「貴重な研究資料だが、予算がないので整理も進まず、保存施設についてはまったくメドが立っていない」と泣き言を述べた。これは、「整理進まぬ“地図の山” 東北大・地理学教室、旧陸軍作製 貴重なアジアの資料」という見出しで、写真入り 6 段分ほどの記事になり、同年 1 月 22 日付の夕刊に掲載された。取材中、「一部は古くから知られていたにしても、全貌は最近判明したことではないのか？」という趣旨の質問(あるいは誘導尋問?)を何回か受け、「ジャーナリストはこういう発想をするのか」と思った。

その記事を見た宮城県土地家屋調査士会の役員が、「6 月に開く同会のアニバーサリー・セミナー『地図と歴史への招待』で、井出孫六氏の講演『地図は国家なり』とあわせて外邦図も展示したいから、数点貸してほしい」と申し出てきた。そこで、展示の際には簡単な表装を施し、そのまま返してもらうという条件で、インド・ビルマの 5 万分 1 図など 5~6 点を貸し出した。展示会場では、戦争体験者をはじめ主として年配の人たちが熱心に見ていて、「戦闘(むしろ敗走)の現場にこういう地図があれば、もっと多くの兵士が生還できただろう」というような声も聞こえた。なお、井出氏の講演内容は同氏の著書に沿ったもので、長岡正利さんが『測量』2004 年 6 号に紹介している明治 14 年の事件をやや詳細に説明・解釈したもの

だった。聞きながら、「地図情報を(たとえありふれたものでも)秘密にしたい」という国家・軍部の意思にどう対処するか、というようなことを考えた記憶がある。

その3年後の1995年に東北大学理学部自然史標本館が建ち、外邦図も収蔵・展示されることになった。渡辺信孝さんら学生集団の活躍で10万枚もの地図が整理できたのは、これが契機である。10月の開館の際にはテレビ・新聞数社が取材に来たが、化石の展示の方が関心をひいたようで、報道での外邦図の扱いは小さかった。朝日新聞だけ、共同のプレス説明に遅れて来て、たまたま残っていた私が少しいねいに説明したところ、記事の中で外邦図に関してもあるスペースを割いてくれた。しかし「敗戦時の混乱に乗じて東北大に搬入」という表現があったので、抗議したところ、「お詫びの意味も込めてもっと詳しく取材したい」ということになり、翌96年1月19日の宮城県版に半頁大の記事が載った。

そこでは、『旧陸軍作製の軍事秘の「外邦図」、接收直前収集していた、平和願い研究活動に利用、東北大理学部』というタイトルで、山東省とジャワの、できればの対照的な2枚の地図の写真とともに、外邦図作製の意図、作成方法、敗戦後の転変、そして整理・収蔵・一部展示に至った経緯等が、かなり詳しく報じられた。中には、「これは長岡さんの論文に書いてあることだが」という前おきで伝えた内容を、私が話したことになっているような問題表現も混入しているけれども、最後は私が「平和的な研究に使っていきたい」と語ったという形で結んである。ただ、記事の冒頭の要旨には、「田村が外邦図作製から収集までの秘話をパンフレットにまとめた」とあり、「新聞記事は何か新しそうなことがないといけないのか」という思いを再びさせられた。

今回の科研費の研究が始まった後の2004年1月31日付日本経済新聞文化面に載った、小林代表が取材対象になった記事も、「…の地図が大量に存在することが地理学者の研究で分かってきた」という文で始まっている。事実と反するものではないが、たぶん「分かっていた」では記事になりにくいであろう。同じころ、NHK エンタープライズが、外邦図に関するテレビ番組を作成しようとして、担当者が立正大の私の研究室にも熱心に取材に訪れ、企画書を提出したが、「今、そしてこれから、どのような問題・話題になるか」という点で疑問が出され、ボツになったと聞く。

人々の関心はもとより多様であるし、マスコミに売り込むことだけが社会の理解を得る手段ではない。しかし、一つの断面がそこから覗けることもたしかであろう。過去への関心は、痛みや懐かしさも伴いながら、多くの人々が各自の経験に応じてもっている。同時に、これからどうなるか、どうしていくかということに、人々が切実な思いをもっていることも疑いのない事実である。大げさに言えばすべての科学研究は、人間社会の未来への貢献の可能性で社会的に評価される。上に例示したマスコミの反応にも、それが陰に陽に現れているとみることができる。私たちの外邦図研究(個別の課題ではない)も、もし過去の事実の復元のみを自己目的化しているように誤解されるところがあるとすれば、それは意識的に改めていかなければならないであろう。単にファンドを獲得するためだけでなく。